

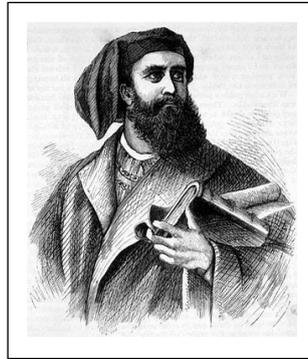
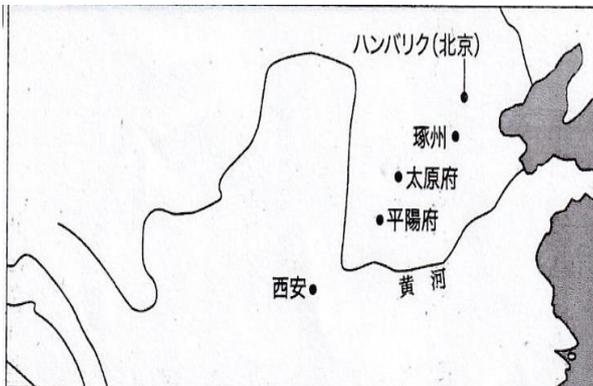
## マルコポーロ東方見聞録 その4

### 雲南・ビルマへの旅

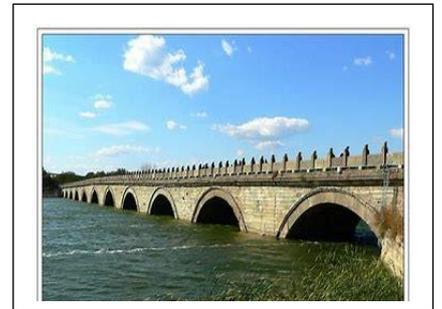
八柳 修之

マルコ等一行が3年半の旅を終えて上都に着き、フビライ・ハーンに気に入られ近侍となり、フビライの使節としてしばしば中国の各地を視察し、その実情を正確に把握し的確に報告、フビライを大いに喜ばれた。

マルコは大ハーンの命を受けて国内の西方の諸地方へ、少なくとも4ヶ月間派遣され、その間、見聞きした模様をつぎのように述べている。以下、西南方の雲南からビルマまでの報告である。



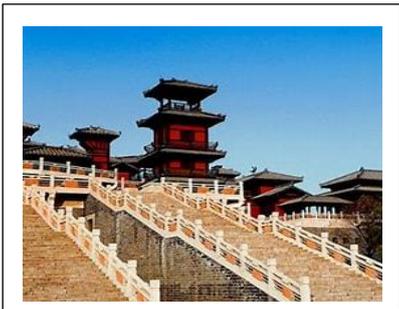
マルコポーロ (年齢不詳)



盧溝橋

ハンバリク (北京) を発って 16 km進むと、プリサンギン (桑乾河) という大きな河に達した。この河は大海に流れ、莫大な商品を携えた沢山の商人が船で往来している。この河にはとても美しい石、大理石の橋が架かっている。橋の名は盧溝橋、西洋人はマルコポーロ・ブリッジと呼んでいる。日本人には盧溝橋事件を思い出す。

その後、マルコは琢州 (ジョンジュウ)、太原府 (タイアンフ)、平陽府 (ピアンフ) を経て黄河を渡った。



琢州 北京広安門から 62 km  
写真：三義門



太原府 現在山西省の州都  
人口：現在 380 万人



平陽府 現在、山西省  
かつて存在した

黄河は河幅が広く水深はとても深く流れも速い。この河は外洋に通じている。河に沿って大小多くの都市があり、商業が発達している。黄河を渡ってしばらくするとケンジャンプ (京兆府、今の西安) に着いた。ここは古代に長く都が置かれた長安の町である。ここはケンジャンプ王国の首都で規模も大きく美しい。歴代、優れた王によって治められ、大層、美しい宮殿がある。



周囲は5マイル (8 km) の城壁で囲まれ、内側には野生の獣や鳥がたくさん棲んでいた。  
(現在、西安は北京から 909 km)

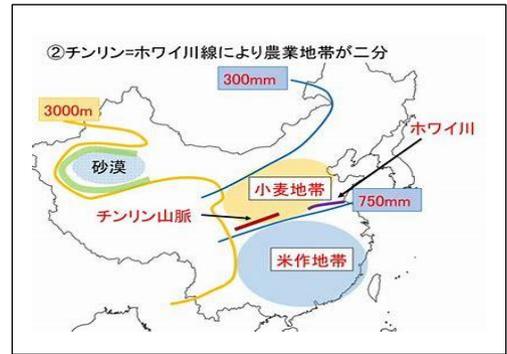
マルコたちは京兆府から西に進み、**風翔**（フォンシャン）から南下して、**チンリン山地**を越えた。この辺りは昔から蜀の栈道と言われた険しい山道である。途中、棚のように木の架け橋を渡したところもあった。こうして、20日目に**アクバルク・マンジ**（現在の漢中府）に着いた。大小多数の都会があり大量のショウガを生産していた。



アルクマンジ



チンリン山地

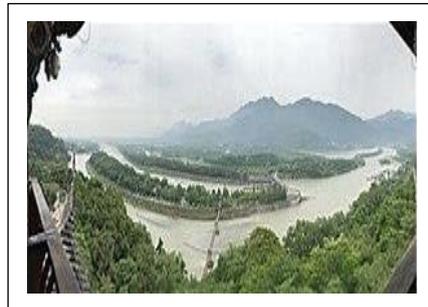


マンジ（南中国）とは**蛮子**。モンゲ・ハーンの時代に雲南征伐を行った後、こう呼んでいる。アクバル・マンジからさらに西方への旅が続けたが、相変わらず険しい山道が続いた。山中にはトラヤクマが多く、眼下には物凄い谷川が渦を巻いて流れていた。20日ほど旅をして、やがて平野に出て**シンドウフ**（成都府）に着いた。（北京から成都間の直線距離は1560km。鉄道では2,160km）

この町の中には大小いくつもの川が流れ、美しい大きな石の橋が架かっていた。マルコは長江（揚子江）の本流と記述しているが、**成都**を流れる**眠江**（みんこう）は揚子江の本流ではない。（長澤）成都からさらに南下して、野を越え谷を渡り、町や村を過ぎて5日目にチベットの東辺を通り**雲南**（カラジャン）に向かった。この地方はモンケ・ハーンがマンジを征服したとき、あらゆる町や村をすべて打ち壊してしまい無残に壊された町の跡ばかり残っていた。トラヤクマ、山ネコの棲みかになっていて、無人の山道を20日間も旅を続けるのは大変危険だった。しかも泊まる家も食料も3日～4日目にあるほか、全く見当たらず、そこで家畜のみまで用意していく必要があった。やっと20日間の旅を終えると、山々の間に沢山の小さな町や村落の地方に出た、マルコ等は**ガインドウ**という町に着いた。この町の貨幣は2種類あって、金の延べ棒のほか塩を固めて銭の形にしたものがあつた。



成都、天府の国とも

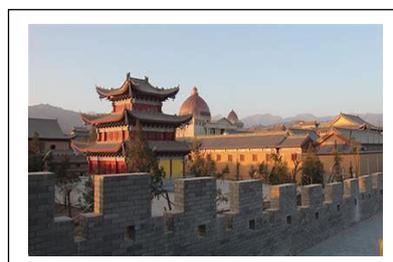


眠江



イラワジ河

ガインドウから**金沙江**（ブリス）という大きな河を渡り、目指す雲南地方に入った。この首都の**大理**（カラジャン）には金沙江から15日かかった。ここの人々は子安貝を貨幣にし、恐ろしく大きなワニ（長さ15m、太さは2m）がいた。大理から西へ5日進んで**永昌**入り、さらに広大な傾斜地を2日半、**イラワジ河**の支流に沿って下り続けると広い平野に至る。それより15日間、険しい地方を越え、深い森を通して、ビルマの**ミエン**の都に着いたという。



マルコ等が実際にビルマまで行ったか、長沢は疑問であるとしている。マルコ等は西南地方への旅を終わったので、ひとまず大都に帰ることにした。帰路ははっきりしていないが、「東方見聞録」では成都から徐州、大都に戻り大ハーンに各地の風俗、習慣など報告したとしている。(その4 完)